

# 芥川龍之介編 *The Modern Series of English Literature* について・補遺

一田端文士村記念館所蔵〈序文〉原稿、  
アーヴィン「劇評家たち」、出典一覧一

澤 西 祐 典

## 【要 旨】

*The Modern Series of English Literature* は、芥川龍之介が旧制高等学校の学生向けに編纂した英語教科書副読本である。本論では、田端文士村記念館が所蔵している同叢書の〈序文〉原稿について、翻刻および校異を行い、原稿用紙の種類や推敲箇所から〈序文〉の執筆時期や当該叢書の編纂意図である〈新しい文芸〉について論じた。また芥川の創作「MENSURA ZOILI」の典拠の一つであるセント・ジョン・G・アーヴィン「劇評家たち」について、当時のアイルランドにおける新劇批評との関連を明らかにした。加えて、本稿末尾では *The Modern Series of English Literature* に収録された各作品の出典と当該書に対する芥川の手書き込み等について報告している。

## 【キーワード】

芥川龍之介 英語教科書副読本 *The Modern Series of English Literature* 英米文学  
アイルランド文学

## はじめに

*The Modern Series of English Literature* (以下、『モダン・シリーズ』と記す) は、芥川龍之介が旧制高等学校の学生向けに編纂した英語教科書副読本で、一九二四年七月から一九二五年五月にかけて全八巻、興文社より刊行された。この『モダン・シリーズ』については、すでに拙論「*The Modern Series of English Literature* について」(『芥川龍之介研究』第八号、二〇一四年七月)において一度論じた。その際には、当該叢書の成立時期や収録作品の傾向、日本では殆ど知られていない作家が収録された第七巻、第八巻の出典元を明らかにし、収録作品と芥川の随筆「近頃の幽霊」等との関連を詳らかにした。

また、澤西祐典・柴田元幸編訳『芥川龍之介選 英米怪異・幻想譚』(岩波書店、二〇一八・一一)においては『モダン・シリーズ』に収録された五一篇のうち未邦訳作品を中心に、二〇篇を選び、新しく訳出した。収録した作家は以下の通り。オスカー・ワイルド、ロード・ダンセイニ、レディ・グレゴリー、エドガー・アラン・ポー、R・L・スティーヴンソン、アンブローズ・ピアース、M・R・ジェイムズ、ブランダー・マッシューズ、セント・ジョン・G・アーヴィン、

H・G・ウェルズ、アーノルド・ベネット、マックス・ビアボーム、アルジャーノン・ブラックウッド、ヴィンセント・オサリヴァン、フランシス・ギルクリスト・ウッド、ステイシー・オーモニア、ベンジャミン・ローゼンブラット、E・M・グッドマン、ハリソン・ローズ、アクメッド・アブダラーである。同書には各作家・作品ごとに、芥川との関連についても短い解説を載せている。その他、『図書』（二〇一九・三）に拙稿「アンソロジスト・芥川龍之介」が掲載されたのに加え、『芥川龍之介選 英米怪異・幻想譚』の刊行に伴い、『読売新聞』（二〇一八・一二・二五・朝刊）に「芥川龍之介 幻の英米文学選集」として当叢書が取り上げられるなど、『モダン・シリーズ』への注目度も高まっている。

本稿においては、『モダン・シリーズ』にまつわる問題として、まず田端文士村記念館所蔵の『モダン・シリーズ』序文の直筆原稿を取りあげ、原稿から見えてくる問題点を整理し、論じたい。また『モダン・シリーズ』の収録作の一つ、セント・ジョン・G・アーヴィン「劇評家たち」を取りあげる。「劇評家たち」は芥川の創作「MENSURA ZOILI」の種本の一つであり、本論においてはアーヴィンが作中で用いている自作に対する劇評を取り入れた手法に注目する。加えて、第五巻評論集に収録されているアンブローズ・ピアス「未来人における喪失」と芥川作品との関連について指摘している。その他、前稿の拙論「*The Modern Series of English Literature* について」では、作品の出典について第七巻・第八巻の報告に留まったが、本稿においては全作品の出典と芥川龍之介が所有していた当該書籍に対する書き込み等について報告する。

## 1. 田端文士村記念館所蔵〈序文〉原稿について

### 1-1. 翻刻および校異

田端文士村記念館には、『モダン・シリーズ』の序文（全巻共通の序文および第四、五、六、七、八巻の序文。資料名・芥川龍之介「THE MODERN SERIES OF ENGLISH LITERATURE」序文原稿）全一八枚が保管されている。原稿はすべて松屋製の二〇〇字詰め原稿用紙が用いられている。当該原稿について、本文の翻刻および校異を示したのち、原稿用紙等を含めた考察を行いたい。

翻刻は、下記の凡例に沿って行った。また、各序文は内容が独立しているため、校異については別章を設けて一括で示すことはせず、それぞれの序文の翻刻に続く形で示した。校異については、凡例に沿って、初出および『芥川龍之介全集』第一二巻（岩波書店、一九九六・一〇）との対照を行った。

#### 【凡例】

- ・改行は、一字下げの箇所のみ原稿に従った。
- ・改ページは「/」記号で示した。
- ・本原稿では句読点を書く際、句読点を直前の文字と一緒にのマスに書き込み、次のマスを空欄としている。それについては翻刻に反映させず、通行の表記で示した。
- ・〔 〕は抹消された部分を示す。〔 [ ] 〕は二重訂正で、〔 [ [ ] ] 〕は三重訂正を意味する。
- ・傍線は抹消された部分の訂正や、挿入のため、行間や枠外に書かれた文字を示す。
- ・□は、判読不可だった文字を示す。また □ で囲んだ文字は、翻刻者の推定を意味する。
- ・仮名遣いは原文に従った。漢字はできる限り原稿に従い、適宜通行の字体に改めた。
- ・明らかな誤字もそのまま翻刻し、当該箇所に「(ママ)」とルビを振った。

- ・各原稿用紙のタイトルに続く括弧内に、原稿用紙の枚数、縦書き／横書きを記す。
- ・校異において、〔原〕は原稿用紙、〔初〕は『モダン・シリーズ』の原書、〔全〕は『芥川龍之介全集』第一二巻（岩波書店、一九九六・一〇）を指す。
- ・校異において、旧字体・新字体の異同は指摘していない。

【全巻共通の序文（全二枚・縦書き）】

[[〔□〕 □〕 □〕 序

学生は新を愛するものである。新を愛する学生にMacaulayやHuxleyを読めと云ふのは残酷と評しても差支へない。尤も教科書となつたが最後、如何なる斬新の名文にもせよ、忽ち退屈を与へるのは僕自身も経験した悲劇である。が、退屈〔にな〕を与るとは云へ、兎に角新は旧よりも幾分か興味を生じ易いであらう。且又新らしい英米の〔作〕文藝〔——たとへばConradやO. Henry〕は大陸の作〔家〕品の英語訳のやうに容易／に読破出来るものではない。それを容易に読破する為には、特に新らしい文藝に対する語学的訓練を受けなければならぬ。教科書の中作品に〔幾分か〕多少の新を加へるのは〔そ〕其の為にも[[〔確かに〕或は □〕確かにに必要であらう。かたがた編者は〔こ〕此の叢〔書〕書も〔、〕幾分か学生諸君の為に役立ちほしないかと思つてゐる。

大正十三年七月

編者記

【校異】

〔原〕与るとは云へ → 〔初、全〕与へるとは云へ

【第四巻の序（全三枚・横書き）】

第四巻の序

Shaw, Galsworthy, Lord Dunsanyの三者は既に誰にも知られてゐる。Ervineも或は学生諸君の耳に熟してゐる名前の一つかも知〔れ〕れない。が、念の為につけ加へれば、彼は一八八三年愛蘭土のBelfastに生まれた戯曲家兼小説家である。一九一五年〔にthe Abbey Theatre〕愛蘭土文藝運動と共に名高いthe Abbey Theatre〔□〕のmanager〔と〕となり、更に又一九一七年欧羅巴の大戦に出征した。“The Critics”の一篇は彼の全／豹を伝へるものではない。しかし兎に角好諺を極めた〔好□〕諷刺劇の佳作たることは事実である。

なほ又Shawの“The Dark Lady of the Sonnet [t] s”を書いたのはSha〔□〕kespeareを記念するa National〔□〕Theatre建立の資金〔□〕を求める為である。この一幕物の[[〔与へた〕Sha □〕中のShakespeareは在来の文藝史家のShakespeareではない。徹頭徹尾Shawら〔□〕しい〔Shakespearである。或は又“Shakespear〔□〕(ShawはShakespeareを上のように綴るのである。)]る。)] as〕／Shakespeareである。〔最後に〕この点は“Caesar and Cleopatra”のCaesarと共に〔“the Shavian type of the great men [”〕〔□〕を〔髣髴するに足る〕示してゐるものとも言はれるであらう。

編〔訳〕者記

【校異】

〔原〕名高いthe Abbey Theatre → 〔初、全〕名高いThe Abbey Theatre

〔原、初〕記念する → 〔全〕記念する

〔原、初〕a National Theatre → 〔全〕A National Theatre

〔原〕 the Shavian type → 〔初、全〕 The Shavian type

〔原〕 編者記 → 〔初、全〕 大正十四年三月 編者記

### 【第五巻の序（全五枚・横書き）】

#### 第五巻の序

Beerbohm, Walkleyの両批評家はいつでも批評上のimpressionistである。が、Shawは誰でも知つてゐるやうに〔□□〕“brilliance”〔に〕のみに安ずる批評家ではない。所謂Life-forceの哲学を高唱して止まない批評家である。もし前二者をart for art's sakeの批評家と〔□〕称するならば、Shawは当然art for life's sakeの批評家と称せられ〔る〕であらう。〔□〕更に翻つてButlerを見れば、これはDarwinの進化論を駁し、Odysseyの作者の女〔る〕であらう。一九八〇年代の英吉利文藝は大體art for art's sakeの精神から〔“〕art for life's sakeの精神に推移したと言つても好い。即ち三者のessaysを併せ読むことは同時代の英吉利文藝の推移に一瞥を与へることにもなる訳で〔□〕ある。〔更に又翻つてButlerを見れば——〕尤もShawの一篇にBeerbohm, Walkleyの数篇を配するのは軽重を失してゐるかも知れない。しかし後二者のessaysは従来余りに閑却されてみた看のある為、特に〔此處〕この巻には多きを嫌はず、編者の愛するものを加へたのである。／

更に又翻つてButlerを見れば、これはDarwinの進化論を駁するにNeo-Lamar〔□〕ckismの進化論を以てした、憂々たる独造底の思想家である。Shawは〔□〕彼の進化論を——この巻に収めた“Darwinism and Vitalism”の思想をButlerの進化論の中に発見した。即ち併せて〔Butlerの〕“Darwin Among the Machines”の小論文を加へ〔る〕た所以である。〔□〕なほ次に附言すれば、〔諷刺小□〕Butler〔□〕は“Life and Habit”等進化論に関する〔〔諸著〕論集〕諸著の外にも、〔Erewhonの如き、〕Odysseyの作者〔□〕をHomer〔以外の〕ならざる女詩人にありとした“the / Authoress of the Odyssey,”それからSwiftの“Gulliver's Travels”の外に新機軸を出した諷刺小説“Erewhon,”最後に〔Shaw, Bennett等の激賞を博し〕当代の社会の機微を穿つた小説〔Wa〕“The Way [to] of All Flesh”等の〔諸著〕逸什を残した。しかも彼〔の一生〕はその生前殆ど英吉利文壇の一顧さへ得ずにしまつたのである。

他の二篇のessaysを収めたのは格別深意の〔ある訳ではない。只〔Bierceの〔essayは〕の辛辣な□〕Bennett, (英) Bierce (米)の両者を〕ある訳ではない。只両者とも犀利の筆に富んだ近代のessayistの面目を窺ふのに足りると／思つたからである。

〔□〕 編者記

#### 【校異】

〔原、初〕 一九八〇年代の → 〔全〕 一八九〇年代の<sup>(1)</sup>

〔原〕 併せ読む → 〔初、全〕 併せ読む

〔原、初〕 閑却されてみた看 → 〔全〕 閑却されてみた観

〔原〕 併せて → 〔初、全〕 併せて

〔原〕 “the Authoress → 〔初、全〕 “The Authoress

〔原〕 編者記 → 〔初、全〕 大正十三年十月 編者記

### 【第六巻の序（全三枚・横書き）】

第八巻に集めた短篇のrealistic傾向に富んでゐるやうに、この巻に集めた短篇は大〔抵〕抵〔□〕又〔R〕romantic趣味を漂はせてゐる。しかしこの巻に名を列した作家は必しもromantic趣味に終始するものではない。たとへばArnold Bennettの如きは仏蘭西風のrealismを多量〔□〕

に具へてゐる作家である。けれども短篇作家たる彼等の力量は畧是等の作品にも髣髴〔することは〕〔出来る〔であらう。〕であらう。〕出来ることと信じてゐる。殊／＼に構想に奇才を誇つた O. Henry の面目は“Roads of Destiny”の一篇に盡きてゐる〔と〕と言つても好い。なほ又〔諸作家の〕O. Henry と号した亜米利加の作家 William Sidney Porter を除けば、他の四人は悉現存する英吉利〔家〕の作家である。

〔Wells b. 1866——〕

〔O. Henry b.1862——d. 1910〕

〔Bennett〕

Wells, Herbert George; b. 1866——

Porter,〔Sidney〕William Sidney; b. 1862——d.〔186〕1910／

Bennett, Enoch Arnold; b. 1867——〔d〕

Chesterton, Gilbert Keith; b. 18〔6〕74——

Beerbohm, Max ; b.1872——

編者記

【校異】

〔原〕悉 → 〔初、全〕悉く

〔原〕編者記 → 〔初〕大正十三年十月 編者記 → 〔全〕大正十三年十月

【第七巻の序文（全三枚・縦書き）】

第〔三〕七巻の序

M. Crawford の〔作品〕名は屢我国にも傳へられてゐる。A. Bierce と A. Blackwood との両作家は既に「第三巻の序」に紹介して置いた。が、他の三人の作家に就いては多少の紹介を要するかも知れない。

E. Benson (1867——) は〔考古学者を兼ねた〕英吉利の作家である。考古学者をも兼ねてゐることは R. James (「第三巻の序」参照) に近いかも知れない。“The Man Who Went Too Far”の中に異教の神 Pan の現／＼れるのも必しも偶然ではないのであらう。

二 V. O’ Sullivan (1872——) は亜米利加の作家である。短篇作家としては相当の名声を博してゐるらしい。“The Interval”の末段の手法は Bierce の辣手段に近いものである。

三 F. Wood は亜米利加の女流作家〔で〕である。〔〔半〕千八百六十何年かに〕「畧半世紀前に生まれた」と云ふ以外に〔生〔年〕憎〕今は生年を詳にしない。“The White Battalion”はその世間に発表した最初の作〔で〕品だと云ふことである。欧羅巴の大戦は Ghost-Story / の分野にも〔新らしい〕少からぬ作品を〔生じ〕残した。これも亦夫等の作品中、興味のあるものの一つである。

大正十三年七月

編者記

【校異】

〔原〕E. Benson → 〔初、全〕1. E. Benson

〔原、初〕現れるのも必しも → 〔全〕現れるのも、必しも

〔原〕二 V. O’ Sullivan → 〔初、全〕2. V. O’ Sullivan

〔原〕三 F. Wood は → 〔初、全〕3. F. Wood は

〔原〕Ghost-Story → 〔初、全〕Ghost Story

〔原〕亦夫等の → 〔初、全〕亦其等の  
 〔原、初〕編者記 → 〔全〕欠

【第八巻の序文（全二枚・縦書き）】

第八巻の序

この巻に集めた英米の作家はいづれも現存する人のみである。S. Aumonier, D. E [a] aston, P. Truscottの三人は英吉利、他は亜米利加の作家である。尤もA. Abdullahだけは名前の示す〔通り、〕やうに欧羅巴人ではない。Afghanistan〔□〕のKabulに生まれた亜刺比亞、土耳其系の東洋人である。

何よりも簡勁を〔目〕とする近代の短篇の特色は是等の作品に〔現れ〕漲つてゐる。殊に露西亜に生／まれ、亜米利加に〔育つた。〕人となつた〔、〕B. Rosenblattの“In the Metropolis”はその尤なるものであらう。それからH. Rhodesの“Extra Men”は欧羅巴の大戦の生んだ、新らしい亜米利加の伝説で〔ある。〕ある。〔名高い〕或はIrvingの“Rip Van Winkle”やHawthorneの“The Gray Champion”等と并〔せ読めば、〕称するのに堪へるかも知れない。

大正十三年七月 編者記

【校異】

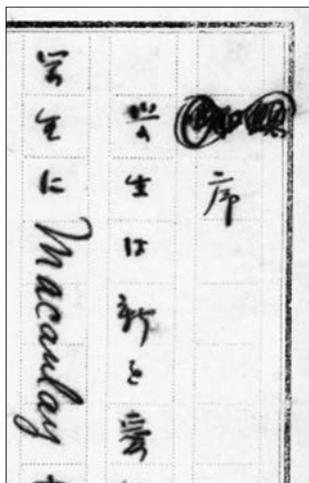
〔原〕亜刺比亞、土耳其系の東洋人 → 〔初、全〕亜刺比亞—土耳其系の東洋人

〔原〕并称するのに → 〔初、全〕並称するのに

〔原、初〕編者記 → 〔全〕欠

1-2. 特記事項

すでに記した通り、原稿用紙は松屋製二〇〇字詰め原稿用紙である。全部で六種類の序文が確認できる。これらは大きく分けると、図①から⑥の通り、縦書きと横書きに二分できる。



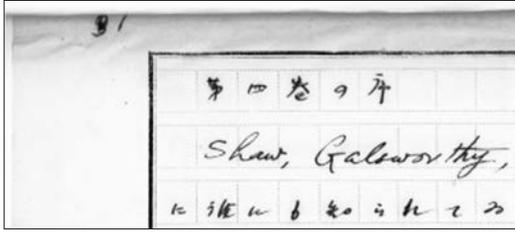
図① 全巻共通の序文・冒頭



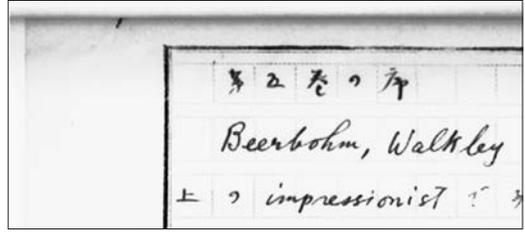
図② 第七巻の序・冒頭



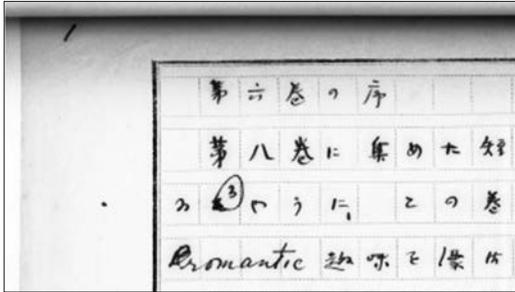
図③ 第八巻の序・冒頭



図④ 第四巻の序・冒頭



図⑤ 第五巻の序・冒頭

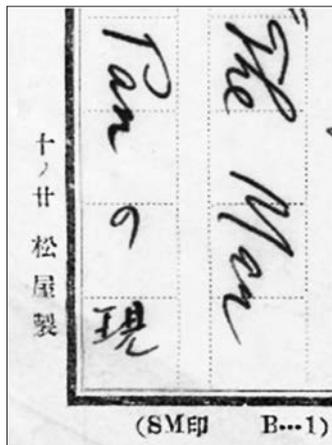


図⑥ 第六巻の序・冒頭

これは、図①から③の原稿群Ⅰ（「全巻共通の序」、「第七巻の序」、「第八巻の序」）が書かれた時期と図④から⑥の原稿群Ⅱ（「第四巻の序」、「第五巻の序」、「第六巻の序」）が書かれた時期が異なることを示唆している。原稿用紙の欄外に印字されたマーク（図⑦から⑩参照）を見ても、原稿群Ⅰと原稿群Ⅱでは同じ松屋製原稿用紙でも異なる時期に印刷されたものであることが確認できる。



図⑦ 全巻共通の序・印字部分



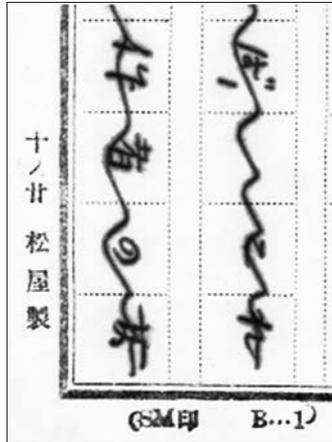
図⑧ 第七巻の序・印字部分



図⑨ 第八巻の序・印字部分



図⑩ 第四巻の序・印字部分



図⑪ 第五巻の序・印字部分



図⑫ 第六巻の序・印字部分

図⑦から⑫は、すべてそれぞれの一枚目のものである。図内の下部分、原稿用紙の枠外にある「(SM印 B...1)」の括弧閉じ部分「)」の位置が、原稿群Ⅰと原稿群Ⅱでは異なっている。一方で、原稿群内では一致しており、原稿群は近い時期に書かれた原稿と推測される。

図①から③を見ても明らかなように、原稿群Ⅰの縦書きで書かれた原稿は、日本語（縦書き）と英字（横書き）が混在しており、原稿用紙の向きを変えて書かなければならず、その反省を踏まえて、原稿群Ⅱの横書き原稿が成立したと考えるのが自然だろうか。少なくとも、『モダン・シリーズ』の刊行に当たり、もっとも早く完成しなければならないのは「全巻共通の序」であることから考えて、成立順は原稿群Ⅰ→Ⅱと考えるべきであろう。

ここで各巻の発行順を確認してみると、すでに拙稿「*The Modern Series of English Literature* について」（前掲）で記したように、奥付に従えば『モダン・シリーズ』の「刊行順は第六巻（1924.7.14）、第七巻（1924.8.18）、第八巻（1924.8.26）、第四巻と第五巻（同時刊行1925.4.4）、第二巻と第三巻（同時刊行1925.5.10）、第一巻（1925.5.23）」となる。しかし、この成立順は原稿群Ⅰ・Ⅱが示す成立順と矛盾する。奥付を信じれば、原稿群Ⅱに属する第六巻が、原稿群Ⅰの第七巻、第八巻に先んじて刊行されていることになる。

また次のような事実がある。校異で示した通り、第六巻原書の序文では、原稿用紙の段階にはなかった「大正十三年十月」という表記が追記されている。そもそもこれは「大正十三年七月一日発行」とする第六巻の奥付と齟齬をきたす。同じ原稿群Ⅱの残り二冊では、原稿用紙にない日付が足され、第五巻が（第六巻と同じく）「大正十三年十月」表記、第四巻が「大正十四年三月」表記となり、奥付は両巻とも「大正一四年四月四日」となっている。

これらのことを総合的に判断すると、第七巻・第八巻が（内容見本として）先行発売され、第四巻・第五巻・第六巻は、大正十四（一九二五）年三月以降、ほとんど同時期に刊行されたと考えられる。図④から⑥の左上、原稿用紙枠外に、原稿の通し番号と見られる数字があるが、原稿群Ⅱのペン種はすべて同一のものであることが、この推論を裏付けている。その場合、第五巻・第六巻の「大正十三年十月」という表記は、編集側の判断で追記されたと考えるのが、現段階で推測しうるもっとも妥当な考えであろうか。

続いて、原稿用紙の削除部分について、もっとも目を引くのは「全巻共通の序」にある「新しい英米の文藝」に関わる部分である。いわく「新しい英米の〔作〕文藝〔——たとへば Conrad や O. Henry〕は大陸の作〔家〕品の英語訳のやうに容易に読破出来るものではない」とし（改

ページ記号は省略、以下同様)、「新しい英米の文藝」の例として、コンラッドとO・ヘンリーの名前を挙げている<sup>(iii)</sup>。その他にも序文には、MacaulayやHuxleyといった固有名詞が挙がり、「新しい英米の文藝」の対立項として「大陸の作〔家〕品の英語訳」といった言葉が出てくる。これらを頼りに『モダン・シリーズ』の意図や意義について、今一度考えてみたい。

まずO・ヘンリーについては、芥川が「第六巻の序」で「殊に構想到に奇才を誇つたO. Henryの面目は“Roads of Destiny”の一篇に盡きてゐると言つても好い」とあるように、構想到に奇をてらつた、いわゆる〈奇妙な味〉の短篇が多く収録されているのが『モダン・シリーズ』の特徴と言ってよいだろう。ピアスの二短篇(「月明かりの道」、「死の診断」)やH・G・ウェルズの作品(「奇妙な蘭の花が咲く」、「林檎」)などが該当するだろう。また、或るテーマを芸術的に描くために「或異常な事件を必要」とする芥川の創作態度とも共通する(「昔」、「東京日日新聞」一九一八・一・一)。

序文の最初に登場するMacaulayは、イギリスの歴史家トーマス・マコーレー(Thomas Babington Macaulay, 1800-1859)のことで、彼が書いた評伝集*Lord Clive*や*Warren Hastings*などは明治・大正期の英語副読本では定番教材となるほど人気があった<sup>(iii)</sup>。芥川も一高時代に教科書として使った経験があり、一九一〇年九月一六日(月推定)付けの山本喜誉司宛て書簡で次のように記している。

水曜日から授業有之、一週独語九時間英語七時間と云ふひどいめにあひ居候 教科書はマカウレイのクライブ カーライルのヒーロー ウォーシツプ及ホーソーンの十二夜物語の抜萃に御坐候

存外平凡なものやうに候へどもそれを極めて正確に且極めて文法的に訳させ候まゝ中々容易な事には無之候 殊にクライブを講ずる平井金三氏の如きはevery bodyを「どの小供でも」と訳すを不可とし必ず「小供と云ふ小供は皆」と訳させI have little moneyを「あまり金を持つてない」と訳すを不可とし「金を持つ事少し」と訳させる位に候へば試験の時が思ひやられ候

「存外平凡なもの」という感想とともに、厳密な翻訳を求められる授業に辟易とした様子が告白されている。『モダン・シリーズ』で多読式を取っているのも、厳密な逐語訳を求める教育スタイルに反発を示した結果とも考えられる。

またマコーレーと並んで登場するHuxleyは、生物学者のトマス・ヘンリー・ハクスリー(Thomas Henry Huxley, 1825-1895)である。小澤儀明「ハックスレーと地質学」(『東洋学芸雑誌』一九二五・一〇)によれば、一高ではハクスリーの*Lay Sermons, Essays and Reviews*の抜粋が英語教科書として使われていたという<sup>(iv)</sup>。*Lay Sermons, Essays and Reviews*は、地質学者となる小澤氏が感銘を受けた、一片のチョークから出発し、地質学の概念を説く小論“On a Piece of Chalk”のように、身近な事物・事象から出発し、科学についてわかりやすく説明した科学入門書である。ダーウィン論の熱心な支持者であったハクスリーの同書には“The Origin of Species”や“Criticisms on ‘The Origin of Species’”といった論が収録されている。芥川は『モダン・シリーズ』第五巻の評論集で、ダーウィン論に関わる二篇(サミュエル・バトラー「機械におけるダーウィン論」、バーナード・ショー「ダーウィン主義と生氣論」)を採録しており、この評論集を意識して名前を出した可能性が高い。

最後に「新しい英米の〔作〕文藝〔——たとへばConradやO. Henry〕」という風に、「新しい英米の文藝」として名前を挙げられた(のちに削除された)ジョセフ・コンラッド(Joseph Conrad,

1857－1924) だが、コンラッドの作品はO・ヘンリーと異なり、『モダン・シリーズ』に作品が採録されていない。芥川がコンラッドの名前を出そうとした意図はどこにあったのか。現在では『闇の奥』の作者として知られ、二十世紀小説の先駆的なイギリス作家としての印象が強いが、コンラッドは生粋のイギリス人ではない。ロシア領ウクライナ生れのポーランド人で、本名はヨゼフ・テオドール・コンラート・ナレチ・コジェニョフスキ (Józef Teodor Konrad Nalecz Korzeniowski) という。十七歳でフランス船に水夫として乗り組み、その三年後、今度はイギリス船に乗り組んだのを契機に英語を覚えた人物である。三十七歳まで海の生活を続け、その後、作家生活に入り、英語で作品を発表するという異色の経歴の持ち主である。『モダン・シリーズ』には、コンラッド同様、非英語圏で生まれて、のちに英語で作品を発表ようになったベンジャミン・ローゼンブラットとアクメッド・アブダラーが収録されている (共に第八巻)。前者はロシア生まれのユダヤ系アメリカ人、後者は芥川が「AfghanistanのKabulに生まれた亜刺比亜、土耳古系の東洋人」と紹介した通り、東洋にルーツを持つアメリカ人である。芥川は彼らを意識して、コンラッドの名前を出そうとしたのかもしれない。

あるいは、芥川龍之介の旧蔵書 (日本近代文学館所蔵・芥川龍之介文庫) を確認すると、コンラッドの著作は *The Shadow-Line; a Confession* (London, Dent, 1917) ならびに *Youth; a Narrative and Two Other Stories* (London, Dent, 1917) の二冊がある<sup>(v)</sup>。例えば “The Shadow-Line” はコンラッドの自伝的海洋小説であり、海の涯てに神秘的な体験をするというあらすじは、未開民族と友情を育むジョン・ラッセル「汚れなき友情」(『モダン・シリーズ』第八巻所収) を想起させる。

もしくは、「大陸の作品の英語訳のやうに容易に読破出来るものではない」と記しているように、英文の難易度それ自体を指しているのかもしれない。試みに、コンラッドの名作短篇 “Youth” の冒頭と「大陸の作品の英語訳」の例として芥川龍之介が愛読したトルストイの『アンナ・カレーニナ』英訳 (Lyof Tolstoy *Anna Karénina* London, Walter Scott, [n.d.]) の冒頭を掲げるが、両者の違いは一読瞭然といえよう。

This could have occurred nowhere but in England, where men and sea interpenetrate, so to speak — the sea entering into the life of most men, and the men knowing something or everything about the sea, in the way of amusement, of travel, or of bread-winning.

We were sitting round a mahogany table that reflected the bottle, the claret-glasses, and our faces as we leaned on our elbows. There was a director of companies, an accountant, a lawyer, Marlow, and myself. The director had been a *Conway* boy, the accountant had served four years at sea, the lawyer — a fine crusted Tory, High Churchman, the best of old fellows, the soul of honor — had been chief officer in the P. & O. service in the good old days when mail-boats were square-rigged at least on two masts, and used to come down the China Sea before a fair monsoon with stun'-sails set alow and aloft. We all began life in the merchant service. Between the five of us there was the strong bond of the sea, and also the fellowship of the craft, which no amount of enthusiasm for yachting, cruising, and so on can give, since one is only the amusement of life and the other is life itself.

(*Youth; a Narrative and Two other Stories* London, Dent, 1917, p.3より)

All happy families resemble one another, every unhappy family is unhappy after its own fashion.

Confusion reigned in the home of the Oblonskys. The wife had discovered that her husband

was too attentive to the French governess who had been in their employ, and declared that she could no longer live in the same house with him. This situation had lasted for three days, and the torment was felt by the parties themselves and by all the members of the family and the domestics. All the members of the family and the domestics felt that it was ridiculous their trying to live together any longer, and that people who meet casually in an hotel had more mutual interests than they, the members of the family and the domestics of the house of Oblonsky. Madame did not leave her own rooms, and it was now the third day that the husband had not been at home. The children ran all over the house as though they were crazy; the English maid quarrelled with the housekeeper and wrote to a friend, begging her to find her another place. The head cook went off the evening before just at dinner-time; the kitchen-maid and the coachman demanded their wages.

(Lyof Tolstoy *Anna Karénina* London, Walter Scott, [n.d.], p.5より)

## 2. 『モダン・シリーズ』収録作品について

### 2-1. セント・ジョン・G・アーヴィン「劇評家たち」について

芥川龍之介の小品「MENSURA ZOILI」(『新思潮』一九一七・一)とセント・ジョン・G・アーヴィン「劇評家たち」との関りについては、伊藤一郎「MENSURA ZOILI 機知はいかに働いているか」(関口安義編『生誕120年 芥川龍之介』翰林書房、二〇一三)に詳しく論じているので、ここでは繰り返さない。「劇評家たち」には作品の種明かしとも言える、「劇評家たち」についての著者からの一言(AUTHOR'S NOTE TO "THE CRITICS")が付されている。

#### AUTHOR'S NOTE TO "THE CRITICS"

I desire to acknowledge my debt to the dramatic critics of Dublin for much of the dialogue in this play. I lifted many of the speeches, making no alteration in them, from the criticism of "The Magnanimous Lover" which were printed in Dublin newspapers on the day after its first production.

「劇評家たち」について著者からの一言

この劇に出てくる発言の大部分はダブリンの劇評家たちから拝借したことを記しておきたい。『高潔な恋人たち』初演の翌日、ダブリンの新聞に出た劇評から、多くの表現を変更なく盗用した。

(邦訳：都甲幸治「劇評家たち」、前出『芥川龍之介選 英米怪異・幻想譚』より。以下同様)

アーヴィンは「劇評家たち」のなかで、アビー座の新作に対する劇評家たちの(出鱈目な)評について、自身の作品に対する辛辣な批評を引用して、劇評家たちに一矢報いたことをここに明かしている。それでは、アーヴィンの作品「高潔な恋人たち」はどのような批評にさらされ、またそれらは「劇評家たち」にどのように活かされているのだろうか。「高潔な恋人たち "The Magnanimous Lover"」は1912年10月17日、アビー座で初演を迎えた。その翌日、*Irish Independent* には次のような劇評が載った。

CENSOR, PLEASE!

I visited the Abbey Theatre last night to do a notice of a new play by Mr. St. John G.

Ervin, entitle “The Magnanimous Lover.” It was received with laughter, cheers, hisses and hooting. The thing is too foul for dramatic criticism, and I am NOT a sanitary inspector.

JACQUES

「高潔な恋人たち」は嘲笑を持って受け入れられ、この劇に必要なのは劇評家でなく、公衆衛生検査官 (sanitary inspector) だ、という辛辣な批評である。これに対して、「著者からの一言」にある通り、アーヴィンはこの評を「劇評家たち」で作品に取り入れる。

Mr. Barbary. Well, they'll have to do somethin' with it. I hear the place isn't popular at all. The dramatic critic on our paper can't bear it. He says to me the other day : “They don't want a dramatic critic round there,” says he, “they want a sanitary inspector.” That was his sarcasm. “An' I'm not that,” says he. “Sure, never despair,” says I. It's him that's sick. It's not much of a job, you know, bein' a dramatic critic in Dublin.

バーバリ氏 でも何とかはしなくちゃならないだろう。ここは全然人気がないって聞いたよ。うちの新聞の劇評家が、ちょっとひどすぎる、って。先日、そいつがこう言ってたよ。「あそこに必要なのは劇評家じゃない、公衆衛生検査官だ」。やつ流の皮肉さ。「で僕は検査官じゃない」って。「そうだな。がっかりすんなよ」って言ってやった。今病気なのはそいつさ。ダブリンで劇評をやるってのは大した仕事じゃない。

上記の通り、公衆衛生検査官という言葉そのまま用い、作品に活かしている。そして、その評を書いた記者は病気にされ、「ダブリンで劇評をやるってのは大した仕事じゃない」と職業まで否定され、皮肉られている。他にも、次のような劇評が作品の下敷きとして使われている。

#### AN ABBEY SHOCKER

##### “The Magnanimous Lover”

Last night Mr. St. John Ervine's one-Act play, “The Magnanimous Lover,” was produced at the Abbey before a large and, I regret to say, generally appreciative audience. (中略) At the fall of the curtain last night I overheard two illustrative criticism. One was from a married lady, who expressed her opinion by the solitary word “admirable” ; the other from a man, who summed up his view in the significant remark ; “I am glad I did not bring a lady to see this show.”

(*Evening Herald* 1912・10・18)

#### THE ABBEY THEATRE

##### A GROSS PERFORMANCE REPEATED

Last night “The Magnanimous Lover” was repeated at the Abbey Theatre. It is really too bad that yet again an effort should be made to destroy the fair fame of Dublin as a centre of what is good in dramatic work by the further production of this gross and abominable stuff.

If the object of those who are responsible for the Abbey Theatre be to see how far they can strain the patience and tolerance of the public, they have apparently now reached the climax.

A crusade against dirty literature has been effectively entered on; but the stage is somewhat elusive, and the filthy things embodied in such a play as this should come rather within the

ban of the police in the absence of any other influence, for day by day our worthy magistrates send people to jail for using language not half as bad as we have just now had to endure at the Abbey — language little less than blasphemous and obscene. There are little girls who sell programmes and chocolates in the theatre, and for the sake of common decency these little ones at least should be excluded, and not, by reason of their employment, forced to hear the sickening and dirty things which the audience, such as it is, pay to tolerate.

(*Freemans Journal* 1912・10・19)

上記のような批判にアーヴィンは耐えかねたようで、新聞雑誌各社（確認できた範囲では *Irish Independent*、*Evening Herald*、*Freemans Journal* の三紙、すべて同年10月22日付け）に公開反論状を送り付けている。

Sir — Hot to my hand come the Press notices of my play, “The Magnanimous Love,” and to my astonishment I find myself described as the author of a “morbid and disgusting drama” full of “gross ribaldry” and “gratuitous filth” “an Abbey Shocker” which is “an atrocity” leaving “a nauseous taste”; “too foul for dramatic criticism”: “a play which will leave an indelible stain on my reputation.” One gentleman incites Dublin playgoers to visit the Abbey at nine o’clock when my play will be over and done with, and they will be able to enjoy Mr. Boyle’s jolly play, “Family Filing,” undisturbed by me. The same gentleman describes me as “a charlatan” (why, he and heaven only knows), and writes of me more in sorrow than in anger.

Another, seemingly bereft of his wits by my play, is led into declaring that he is Not a sanitary inspector. The poor fellow ought to have known that this declaration from his reference to my play that, so far from being a sanitary inspector, he is merely an insanitary journalist.

Last of all comes the gentleman who quotes the remarks of two members of the audience.

One, a married lady no less. Said but a solitary word; “Abominable!” I thank the restraints of marriage for that brevity. Had she been single—. The other, a man (whether married or single is not stated) significantly remarked; “I am glad I did not bring a lady to see this show!” That, sir. Is precisely what Henry Hinde in my play would have said. (後略)

紙幅の都合上、劇評がどの場面で踏襲されているか、逐一確認はしないが、当時の劇評を見事に “The Critics” に散りばめ、作品に昇華している。余談ではあるが、その手腕に、実在の劇評家たちも脱帽したらしく、「劇評家たち」が上演された翌日（1913年11月21日）の *Evening Herald* 紙の劇評欄には “It is only fair to say that, with many of the Pressmen, I really enjoyed the little skit, which, to my mind, is much more clever than Mr. Ervine’s more ambitious work.” と惜しめない賛辞を送っており、好評を博したようだ。

## 2-2. アンブローズ・ビアス「未来人における喪失」と芥川龍之介「鼻」

『モダン・シリーズ』の第五巻は *Modern Essays* と銘打たれ、評論が集められている。翻刻した「第五巻の序」の訂正跡を見ていただいたらわかる通り、芥川は収録作品を紹介するにあたり、何度も推敲を重ね、意を尽くして各篇を紹介しようとしている。言い換えれば、芥川にとって

思い入れの深い小品が集められているとも言えるだろう。その中で、芥川が「犀利の筆に富んだ近代の essayist の面目を窺ふのに足りる」一篇として紹介されているのが、Ambrose Bierce の “Some Privation of the Coming Man” である。

これは文明が発展していった際に生じる未来人の身体的欠如についてピアスが論じたものだが、前半部分は文明社会における嗅覚の必要性の減退から鼻について論じている。その過程で、歴史上で特筆すべき鼻を持った人物について活写している箇所がある。

Meantime, history is full of noses, as is the literature of imagination — some of them figuratively, some literally, shining beacons that splendor “the dark backward and abysm of time.” Of the world's great, it may almost be said that by their noses we know them. Where would have been Cyrano de Bergerac in modern story without his nose? By the unlearned it is thought that the immortal Bardolph is a creation of Shakspeare's genius. Not so; an ingenious scholar long ago identified him as an historical character who but for the poet's fine appreciation of noses might have blushed eternally unseen. It is nothing that his true name is no longer in evidence in the annals of men; as Bardolph his fame is secure from the ravening tooth of time.

Even when a nasal peculiarity is due to an accident of its environment it confers no inconsiderable distinction, apart from its possessor's other and perhaps superior claims to renown, as in the instances of Michael Angelo, Tycho Brahe and the beloved Thackeray, in whose altered frontispiece we are all the more interested because of his habit of dipping it in the Gascon wine.

シェイクスピアの劇に登場するサヴィヤン・ド・シラノ・ベルジュラック（大きな鼻の持ち主）やバードルフ（鼻が赤い）、芸術家のミケランジェロ（有能過ぎて鼻を折られる）、ティコ・ブラーエ（決闘で鼻を削がれる）、サッカレー（ワインに鼻をつける習慣があった）といった文芸上の登場人物から実在の偉人まで、鼻にまつわるエピソードのある人物を挙げながら「鼻（嗅覚）」について考察を進めていく。この後も、オウディウスやダンテが登場する。異常な鼻の持ち主と聞いて思い出されるのは、やはり芥川の「鼻」（『新思潮』一九一六・二）の禅智内供であろう。芥川がピアスのエッセイを読んだのは、「鼻」執筆後のことと推測されるが、夏目漱石『吾輩は猫である』に登場する「鼻」談義同様、芥川が興味深く読んだ姿が容易に想像できる。ピアスの『悪魔の辞典』に触発され、芥川が『侏儒の言葉』を草し、ピアス「月明かりの道」が「藪の中」の触媒となった事実は有名だが、ここにも両者の感性の呼応を見ることができよう。

### 3. 収録作品と出典一覧

『モダン・シリーズ』に収録されている作品とその出典と考えられる書物を一覧にして挙げておく。書誌を挙げているものは、日本近代文学の芥川龍之介旧蔵書（芥川龍之介文庫）で確認できたものである。また当該書に当該作品に関わる書き込みがある場合は、備考欄にその旨を記しておいた。各巻のタイトルおよび邦訳が確認できなかったものには、こちらで仮題を附した<sup>(vi)</sup>。

第一巻 近代御伽噺集／Vol.I Modern Fairy Tales

1. オスカー・ワイルド「身勝手な巨人」／Oscar Wilde “Selfish Giant”

出典：Oscar Wilde *Happy Prince*

備考：当該書は芥川龍之介文庫に見当たらないが、一九一三年八月二日付け浅野三千三あて書簡に「‘石榴の家’、‘HAPPY PRINCE’の所謂土耳其絨毯の如く愛すべき御伽噺」があると紹介している。

2. オスカー・ワイルド「幸福の王子」／Oscar Wilde “Happy Prince”

出典：Oscar Wilde *Happy Prince*

備考：同前

3. ロード・ダンセイニ「追い剥ぎ」／Lord Dunsany “The Highwaymen”

出典：Lord Dunsany *The Sword of Welleran and Other Stories* (London, Allen, 1908)

備考：日本近代文学館所蔵・芥川龍之介文庫の当該書、冒頭には「我鬼」の署名あり。末尾には「June 29<sup>th</sup> 17 Tokio」の書き込み<sup>(vii)</sup>。目次の“The Highwaymen”に、アンダーラインあり（他作品はなし）。“The Highwaymen”本編末尾（P.124）には「a lovely crime」もしくは「a lovely crime」と読める筆記体の書き込みがある。

4. ロード・ダンセイニ「兎とカメに関する驚くべき真相」

／Lord Dunsany “The True History of the Hare and the Tortoise”

出典：Lord Dunsany *Fifty-One Tales* (London, Mathew, 1915)

5. レディ・グレゴリー「ヴェスワラガル」／Lady Gregory “Beswarragal”

出典：Lady Gregory *The Kiltartan Wonder Book* (Dublin, Maunsell, [n. d.])

備考：末尾に「18<sup>th</sup> June '14」の書き込み<sup>(viii)</sup>。当該書中の“Beswarragal”には、Margaret Gregoryによる挿絵が二点ある。

6. レディ・グレゴリー「ショーニーン」／Lady Gregory “Shawneen”

出典：Lady Gregory *The Kiltartan Wonder Book* (Dublin, Maunsell, [n. d.])

備考：末尾に「18<sup>th</sup> June '14」の書き込み<sup>(ix)</sup>。当該書中の“Shawneen”には、Margaret Gregoryによる挿絵が一点ある。

7. ラドヤード・キップリング「白オットセイ」／Rudyard Kipling “The White Seal”

出典：Rudyard Kipling *The Jungle Book* (London, Macmillan, 1908)

備考：当該書末尾に縦書きで「一九一二年五月廿一日」の書き込み<sup>(x)</sup>。“The White Seal”はp.127からp.157まで。そのうち下記部分にアンダーラインが引かれている。p.135 l.11からl.15及びp.151 l.6、同頁l.26からp.152 l.7、p.156 l.3からl. 6、同頁l.17からl.20まで。また、『モダン・シリーズ』に採録されるにあたって、同作品のエピローグに掲げられている英詩が割愛されている。

8. ラドヤード・キップリング「リッキ・ティッキ・ターヴィ」/  
Rudyard Kipling “‘Rikki-Tikki-Tavi’”

出典：Rudyard Kipling *The Jungle Book* (London, Macmillan, 1908)

備考：当該書末尾に縦書きで「一九一二年五月卅一日」の書き込み<sup>(xi)</sup>。“The White Seal”は p.163からp.197まで。そのうち下記部分にアンダーラインが引かれている。p.165 1.2から1.3及びp.187 1.16から1.17、p.191 1.3から1.6、p.193 1.10、同頁1. 27。また、『モダン・シリーズ』に採録されるにあたって、同作品のエピローグに掲げられた英詩が割愛されている。

第二巻 近代短篇小説集／Vol.II Modern Short Stories

1. エドガー・アラン・ポー「天邪鬼」/Edgar Allan Poe “The Imp of the Perverse”

出典：Edgar Allan Poe *The Works of Edgar Allan Poe vol.2* (New York, Collier, 1904)

備考：目次の“The Imp of the Perverse”の頭に「○」印の書き込み（他作品にもあり）。当該書末尾には「18th Nov. 1913」の書き込み<sup>(xii)</sup>。

2. ロバート・ルイス・ステューヴンソン「マークハイム」/R. L. Stevenson “Markheim”

出典：*Selected English Short Stories (Nineteenth Century)* with an introduction by Hugh Walker (London, Oxford University, 1915) もしくは *English Short Stories, Selected to Show the Development of the Short Story from the Fifteenth to the Twentieth Century* (London, Dent, [n. d.] )

3. ラドヤード・キップリング「幻の人力車」/Rudyard Kipling “The Phantom ‘Rickshaw’”

出典：*The Best Ghost Stories*, intro by Arthur B. Reeve (New York, Boni and Liverght, c1919)

4. ジョージ・ギッシング「貧乏な紳士」/G. Gissing “A Poor Gentleman”

出典：George Gissing *The House of Cobwebs* (London, Constable, 1919)

5. トマス・ハーディ「妻ゆえに」/T. Hardy “To Please His Wife”

出典：Thomas Hardy *Life’s Little Ironies, a Set of Tables with Some Colloquial Sketches Entitled a Few Crusted Characters* (London, Macmillan, 1920)

備考：当該作品冒頭 (p.125) の「LIFE’S LITTELE IRONIES」にアンダーラインがあり、その横に「不用」の書き込み。

第三巻 近代幽霊小説集／Vol.III Modern Ghost Stories

1. アンブローズ・ビアス「月明かりの道」/Ambrose Bierce “The Moonlit Road”

出典：Ambrose Bierce *The Collected Works of Ambrose Bierce Vol.III Can Such Things Be ?* (New York, Neale, 1910)

備考：目次の当該作品頭に黒丸（・）の書き込みあり（他作品にも見られる）。

2. アルジャーノン・ブラックウッド「双生児の恐怖」/

A. Blackwood “The Terror of the Twins”

出典：Algernon Blackwood *The Lost Valley and Other Stories* (London, Nash, 1914)

備考：当該書末尾に「may 20th '18 Kamakura」の書き込みあり<sup>(xiii)</sup>。

3. M・R・ジェームズ「秦皮の木」／Rhodes James “The Ash-Tree”

出典：Montague Rhodes James *Ghost-Stories of an Antiquary* (London, Arnold, 1920)

備考：当該作はp.81-112。そのうちp.107 l.18-p.109末までページ脇に傍線が引かれ、p.107に「good」の書き込み。当該作品末尾 (p.112) に「ヨロシ Jules □□□□ニ蜘蛛の話ありコノ話ノ方遙ニマサル」。当該書末尾には「Nov. 1st 1920 Tabata」の書き込みあり<sup>(xiv)</sup>。

4. H・G・ウェルズ「奇妙な蘭の花が咲く」／

H. G. Wells “The Flowering of the Strange Orchid”

出典：H. G. Wells *The Stolen Bacillus, and Other Incidents* (Leipzig, Tauchnitz, 1896)

5. ブランダー・マシューズ「張りあう幽霊」／Brander Matthews “The Rival Ghosts”

出典：*The Best Ghost Stories*, intro by Arthur B. Reeve (New York, Boni and Liveright, c1919)

備考：該当作品末尾に「コンナ話ヲ書ク大学教授ガアルンダカラタノモシイ」の書き込み<sup>(xv)</sup>。

第四巻 近代戯曲集／Vol.IV Modern Short Plays

1. バーナード・ショー「ソネットの黒婦人」／

Bernard Shaw “The Dark Lady of the Sonnets”

出典：Bernard Shaw *Dramatic Works Vol.20 The Dark Lady of the Sonnets* (London, Constable, 1910)

2. ロード・ダンセイニ「おき忘れた帽子」／Lord Dunsany “The Lost Silk Hat”

出典：Lord Dunsany *Five Plays* (New York, Kennerley, 1914)

備考：当該書末尾に「25<sup>th</sup> Sept '15 Tabata」の書き込みがある<sup>(xvi)</sup>。

3. ジョン・ゴールズワージー「最初と最後」／John Galsworthy “The First and the Last”

出典：John Galsworthy *Six Short Plays* (London, Duckworth, 1921)

4. セント・ジョン・G・アーヴィン「劇評家たち」／John G. Ervine “The Critics”

出典：St. John G. Ervine *Four Irish Plays* (London, Maunsell, 1914)

備考：当該作品の登場人物表 (p.80) に「入用」、同頁の「AUTHOR'S NOTE TO “THE CRITICS”」部分に「最後ニ入レル」と『モダン・シリーズ』用の指示が書き込まれている。

第五巻 近代評論集／Vol.V Modern Essays

1. G・K・チェスタトン「クリスマス」／G. K. Chesterton “Christmas”

出典：Gilbert Keith Chesterton *All Things Considered* (London, Methuen, 1916)

2. A・B・ウォークリー「シェイクスピア氏の無礼」／

A. B. Walkley “Mr. Shakespeare Disorderly”

出典：A. B. Walkley *Pestiche and Prejudice* (London, Heinemann, 1921)

3. A・B・ウォークリー「映画評」／A. B. Walkley “The Movies”  
出典：A. B. Walkley *Pestiche and Prejudice* (London, Heinemann, 1921)
4. A・B・ウォークリー「同人批評」／A. B. Walkey “Coterie Criticism”  
出典：A. B. Walkley *Pestiche and Prejudice* (London, Heinemann, 1921)
5. サミュエル・バトラー「機械における進化論」／  
Samuel Butler “Darwin Among the Machines”  
出典：不明
6. マックス・ビアボーム「どう書けばいい？」／Max Beerbohm “‘How Shall I Word it ?’”  
出典：Max Beerbohm *And Even Now* (London, Heinemann, 1920)  
備考：当該書末尾に「July 4<sup>th</sup> 1921 Hankow」と書き込みがある<sup>(xvii)</sup>。
7. マックス・ビアボーム「ウィリアムとメアリー」／Max Beerbohm “William & Mary”  
出典：Max Beerbohm *And Even Now* (London, Heinemann, 1920)  
備考：当該書末尾に「July 4th 1921 Hankow」の書き込み。当該作末尾 (p.285) に「ウマイ 往年ノ Max デハナイ 敬服シタ」と書き込み<sup>(xviii)</sup>。
8. アーノルド・ベネット「床屋」／Arnold Bennett “The Barber”  
出典：Arnold Bennett *Things That Have Interested Me* (London, Chatto & Windus, 1921)  
備考：当該書末尾に「July 2nd '21 Tokio」の書き込みがある<sup>(xix)</sup>。
9. バーナード・ショー「ダーウィン主義と生氣論」／  
Bernard Shaw “Darwinism & Vitalism”  
出典：Bernard Shaw *Back to Methuselah* (London, Constable, 1921)  
備考：当該書の序文 (Preface) 中の “Why Darwin converted the crowd” の章題を “Darwinism & Vitalism” に変更して採録したもの。「始まりを表すと思われる長い傍線と章立てを示す「1）」という書き込み、続いて各章に「2)」「3)」「4)」「5)」「6)」と章番号が付され、第六章 (終章) に当たる “A sample of Lamercko-Shavian invective” の末尾には傍線と共に、「ココマデ」の書き込みがある。本文の異同については、第六章の章題が “A sample of vitalistic invective” に変更されているだけで、この変更についても芥川の書き込みが確認できた<sup>(xx)</sup>。
10. アンブローズ・ビアス「未来人における喪失」／  
Ambrose Bierce “Some Privations of the Coming Man”  
出典：Ambrose Bierce *The Collected Works of Ambrose Bierce Vol.IX Tangential Views* (New York, Neale, 1910)  
備考：当該作品の目次脇に点 (・) の書き込みがある (他に “Columbus” のタイトル頭にも同様の書き込みあり)。

第六巻 続・近代短篇集／Vol.VI More Modern Short Stories

1. H・G・ウェルズ「林檎」／H. G. Wells “The Apple”  
出典：H. G. Wells *The Plattner Story and Others* (Leipzig, Tauchnitz, 1900)  
備考：当該作品末尾 (p.108) に「ヨロシ 一冊中ノ白眉乎」と書き込みがある<sup>(xxi)</sup>。
2. O・ヘンリー「運命の道」／O. Henry “Roads of Destiny”  
出典：O. Henry *Roads of Destiny* (London, Hodder, [n. d.])
3. アーノルド・ベネット「不老不死の靈薬」／Arnold Bennett “The Elixir of Youth”  
出典：Arnold Bennett *Tales of the Five Towns* (London, Nelson, [n. d.])
4. G・K・チェスタトン「透明人間」／G. K. Chesterton “The Invisible Man”  
出典：Gilbert Keith Chesterton *The Innocence of Father Brown* (London, Cassell, 1920) もしくは Ernest Rhys and C. A. Dawson Scott edited *31 Stories by Thirty and One Authors* (New York, Appleton, 1923)
5. マックス・ビアボーム「A・V・レイダー」／Max Beerbohm “A. V. Laidler”  
出典：Max Beerbohm *Seven Men* (London, Heinemann, 1920)

第七巻 続・近代幽霊小説集／Vol.VII More Modern Ghost Stories

1. F・マリオン・クラフォード「上床」／M. Crawford “The Upper Berth”  
出典：F. Marion Crawford *Uncanny Tales* (London, Unwin, 1917)  
備考：該当書末尾に「コイツノ怪談モ下手糞ナリ」、「3rd July 1920」と書き込みがある<sup>(xxii)</sup>。
2. アンブローズ・ピアス「死の診断」／Ambrose Bierce “Diagnosis of Death”  
出典：Ambrose Bierce *The Collected Works of Ambrose Bierce Vol.III Can Such Things Be ?* (New York, Neale, 1910)
3. E・F・ベンソン「遠くへ行き過ぎた男」／E. Benson “The Man Who Went Too Far”  
出典：*The Best Ghost Stories*, intro by Arthur B. Reeve (New York, Boni and Liveright, c1919) もしくは J. Walker McSpadden edited *Famous Psychic Stories* (New York, Crowell, c1920)  
備考：当該書前者の最終ページには「August 31st 1920 Tabata」、当該作末尾 (p.107) には「チョット面白い」と書き込みがある<sup>(xxiii)</sup>。当該書後者の当該作品末尾 (p.175) には「motif はよし 書き方は駄目なり」、最終ページには「Sept 26th 1921 Tabata」と書き込みがある<sup>(xxiv)</sup>。
4. アルジャーノン・ブラックウッド「スランバブル嬢と閉所恐怖症」／  
Algernon Blackwood “Miss Slumbubble—and Clawstrophobia”  
出典：Algernon Blackwood *The Listener and Other Stories* (London, Eveleigh Nash, 1916)  
備考：当該作品末尾 (p.335) に「ワルクナイ」、最終ページに「March 10th 1919 Tabata」との書き込みがある<sup>(xxv)</sup>。

5. ヴィンセント・オサリヴァン「隔たり」／Vincent O' Sullivan “The Interval”  
出典： *The Best Ghost Stories*, intro by Arthur B. Reeve (New York, Boni and Liverght, c1919)

6. フランシス・ギルクリスト・ウッド「白大隊」／F. G. Wood “The White Battalion”  
出典：Edward J. O'Brien edited *The Best Short Stories of 1918* <sup>(xxvi)</sup>

#### 第八巻 同時代雑誌小説集／Vol.VIII Modern Magazine Stories

1. ステイシー・オーモニア「ウィチ通りはどこにあった」／  
Stacy Aumonier “Where was Wych Street?”

出典：Edward J. O'Brien and John Coumos edited *The Best British Short Stories of 1922*  
(Boston, Small, c1922)

2. ベンジャミン・ローゼンブラット「大都会で」／Benjamin Rosenblatt “In the Metropolis”  
出典：Edward J O'Brien edited *The Best Short Stories of 1922* <sup>(xxvii)</sup>

3. E・M・グッドマン「残り一周」／E. M. Goodman “The Last Lap”

出典：Ernest Rhys and C. A. Dawson Scott edited *31 Stories by Thirty and One Authors* (New York. Appleton, 1923)

4. ドロシー・イースタン「芝刈り機」／Dorothy Eastern “The Reaper”

出典：Edward J. O'Brien and John Coumos edited *The Best British Short Stories of 1922*  
(Boston, Small, c1922)

5. ジョン・ラッセル「汚れなき友情」／John Russell “The Price of the Head”

出典：Ernest Rhys and C. A. Dawson Scott edited *31 Stories by Thirty and One Authors* (New York. Appleton, 1923)

6. ハリソン・ローズ「特別人員」／Harrison Rhodes “Extra Men”

出典：Edward J. O'Brien edited *The Best Short Stories of 1918* <sup>(xxviii)</sup>

7. パリー・トラスコット「じっと座る女」／Parry Truscott “The Woman Who Sat Still”

出典：Edward J. O'Brien and John Coumos edited *The Best British Short Stories of 1922*  
(Boston, Small, c1922)

8. アクメッド・アブダラー「ささやかな忠義の行い」／

Achmed Abdullah “A Simple Act of Piety”

出典：Edward J. O'Brien edited *The Best Short Stories of 1918* <sup>(xxix)</sup>

#### 謝辞

本研究はJSPS科研費JP16K16778の助成を受けたものである。

註

- i これについては『芥川龍之介全集』第十二巻の「校異」で「改む」と言明されている。
- ii 前掲『芥川龍之介選 英米怪異・幻想譚』にも報告を載せている。また、二〇一八年一月四日、田端文士村記念館で開催された「芥川龍之介シンポジウム」において鈴木暁世氏も言及された。
- iii 江利川春雄『日本人は英語をどう学んできたか』（研究者、二〇〇八・一一）、池田哲郎・長沢 都「日本見在英語教科書志（中）」（『日本英学史研究会研究報告』、一九六八・一）、川戸道昭「明治時代の英語副読本（I）」（『英学史研究』一九九五）、下平都「日本見在英語教科書志（下）」（『日本英学史研究会研究報告』一九六九・一）などに詳しい。
- iv 川戸道昭編「明治期外国文学英語副読本一覧 作家別・刊行年順」（二〇〇三・七・三〇作成、<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~mkawato/ListofEssayforHP.html> 上に公開、最終閲覧日二〇一九・一・三十一日）には、Huxleyの英語副読本として、*Selections from Huxley's Lay Sermons, Addresses and Reviews* (Maruya, 1896) という書名が確認できる。
- v 「『我鬼窟日録』より」（『サンエス』一九二〇・三・一）に「丸善より本来。コンラッド二、ジョイス二」とあり、この二冊がそれであると考えられる。
- vi 具体的には、Lady Gregory “Beswarragal”、John Galsworthy “The First and the Last”、G. K. Chesterton “Christmas”、A. B. Walkley “Mr. Shakespeare Disorderly”、A. B. Walkley “The Movies” 同 “Coterie Criticism”、Samuel Butler “Darwin Among the Machines”、Max Beerbohm “How Shall I Word it?”、Max Beerbohm “William & Mary”、Arnold Bennett “The Barber”、Bernard Shaw “Darwinism & Vitalism”、Ambrose Bierce “Some Privations of the Coming Man”、Dorothy Eastern “The Reaper”、Parry Truscott “The Woman Who Sat Still” を指す。
- vii 末尾の書き込みに関してのみ、倉智恒夫「芥川龍之介読書年譜 —— 英・露・独・北欧文学関係図書——」（『現代文学 第27号』一九八三・六）に指摘がある。
- viii 前掲、倉智論文に指摘がある。
- ix 前掲、倉智論文に指摘がある。
- x 前掲、倉智論文に指摘がある。
- xi 前掲、倉智論文に指摘がある。
- xii 末尾の書き込みに関してのみ、前掲・倉智論文に指摘がある。
- xiii 前掲、倉智論文に指摘がある。
- xiv 前掲、倉智論文に指摘がある。
- xv 前掲、倉智論文に指摘がある。
- xvi 前掲、倉智論文に指摘がある。
- xvii 前掲倉智論文には日付部分「July 4<sup>th</sup> 1921」のみ報告がある。
- xviii 前掲、倉智論文に指摘がある。
- xix □内は論者の推測。前掲倉智論文には日付部分「July 2nd 1921」のみ報告がある。
- xx 前掲、澤西祐典「芥川龍之介におけるバーナード・ショー受容について：受容遍歴・東京帝国大学時代・「西方の人」を中心に」より。
- xxi 前掲、倉智論文に指摘がある。
- xxii 前掲、倉智論文に指摘がある。
- xxiii 日付は前掲、倉智論文にも指摘がある。同論文には「コレハ幽霊ノ話ヂヤナイヂヤナイカ」

がE. F. Bensonの作品の感想として報告されているが、これは誤りで、Leopold Kompert “The Silent Woman” に対する感想である。

xxiv 前掲、倉智論文に指摘がある。ただし、McSpadden編書の書き込みについては「motif よし書き方は駄目なり」と報告されている。

xxv 前掲、倉智論文に指摘がある。

xxvi 澤西「*The Modern Series of English Literature* について」（前掲）で報告した通り、日本近代文館所蔵芥川龍之介文庫に当該書は見つかっていない。

xxvii 日本近代文学館所蔵芥川龍之介文庫に当該書は見当たらないため、書誌不明。

xxviii 註（xxvii）に同じ。

xxix 註（xxvii）に同じ